

続青春の噴門・抜粋

哲太郎は、車を走らせながら、隣の席で押し黙ったままうな垂れている冴子をちらちらと見やっていた。冴子の身体は曾てのような澁刺とした生気が影を潜め、七年余りの内縁の妻としての張りのない生活の中で随分と老けたように見えた。冴子のそんな様子から、面と向かつて問い掛けもならないような雰囲気コンパートメントを支配していた。

「可哀想に、随分と苦勞をしたんだろぅな…」

哲太郎は、自分との繋がりが切れていた長い年月の間の生活と、それから蓄積される心理状態を想像していた。

「随分と老けて、おっさんのようになって…」

冴子は冴子で、相変らず「屈託のない茫洋とした様子」で車を運転している哲太郎をちらちらと見やりながら思っていた。十七年という歳月は、二人の間に簡単には元に戻れない深い溝を掘ってしまったようだった。それなのに、冴子は、哲太郎に連れ去られるままに身を任せて従って来てしまっている自分に気付いて、内心、自分の気持ちに訝った。

「非は全部自分にある…」

哲太郎は、率直にそれを認め、冴子を成り行きに任せたことを悔い、そんな目に遭わせざるを得なかった冴子がいじらしくもあり、不憫にも思われた。冴子が抗いもせず、おと

「なしく従いて来てくれたことだけが僅かに救いだつた。」

ますとみ

哲太郎は、冴子をいきなり南伊豆に連れて行くのを止めて、増富の家の方に行くことにし、佐久甲州街道を南下して、海ノ口から清里を経て、葦崎の手前で塩川沿いの道を再び北上して増富に向かった。

増富の家に着くと、哲太郎は、さちと過ごした想い出深い締め切つたままの居間を素通りして、奥座敷に冴子を招じ入れた。冴子は、がらんどうのこの旅館とおぼしき広い空間を見て、訝つた。

冴子はその訝しげな様子を察して、「後でちゃんと説明するから、じつとしていてくれ……」と云つて、いつものように隣の旅館に挨拶に行き、序に、二人分の仕出しを頼んで直ぐに戻つて来て、南伊豆の金田中と、下賀茂の金田中支店のサブと小料理屋「さち」の店を切り盛りしているよねに電話で「二日後に帰る……」と連絡した。

「疲れたろう……、今、隣の旅館で仕出しを頼んできたから、届くまで温泉の湯に浸かつて身体を休めよう……」

哲太郎が冴子を誘つた。

哲太郎は、さちの位牌に冴子を連れてきていることを報せるために露天風呂に面した側

の襖を少し開けて、冴子と連れ立つて湯に入った。

「後で詳しく話すけど、こころは、元は旅館だったんだ…、ある女性のためにそれを買って住いにしていたのさ…、

今はもうその女性はいない…、だから今はもうこんな広い空間は無用の長物なんだが…、想い出深いので手放せない…、何れは、元のようにこじんまりした割烹旅館にして、使おうかとも考えている」

哲太郎はしんみりした口調で冴子の耳元で囁くように云った。そして、冴子を抱え上げて自分の膝の上に乗せて、冴子を抱き締めて体中を擦った。哲太郎の怒張した玉茎が冴子の広げられた股間の前で凜立して、冴子の臍の前で前後に脈動していた。冴子の気持ち气和らぐのに時間は掛からなかった。

長い年月閉ざされていた冴子の性愛への関心がその非日常的な現実の前に急速に擡げられてきた。そして、冴子は、哲太郎に申し掛かって、両腕を哲太郎の太い首に回してしがみ付いていった。冴子は、自然な動作で腰を上下に動かした。哲太郎の鈴口と玉茎の腹が冴子の空割の谷間を摺り動き、冴子は久しく忘れていた快感に打ち震え、目を閉じて唇を噛み、首をのけ反らせて、「ああっ…」と、小さく声を立てた。

哲太郎は、回りくどい手続きを省いて、冴子の太股を抱え上げて、自分の凜立する玉茎

の頭に冴子の火床口を被せるようにして、下に降ろした。この七年余り、修三との淡泊な夫婦生活では味わったことのない強い衝撃で冴子の下腹部が貫かれた。冴子は、悲鳴に近い叫び声を上げて、細く長く引いた。

哲太郎は、この十七年間の冴子との間の空白を埋めようとするかのように、一気に激しく腰を動かした。それは、散々さちに言い含められたような「女に優しい」動作ではなかった。冴子は、あつという間に頂上に昇り詰めて、絶頂に達し、「ああっつ、もうだめっつ、往くわっ」と、叫んで、息を引きつらせて、急にぐったりとなった。

呼吸を合わせ損なつて、哲太郎は急いで更に腰を煽つて攻め立てたものの、冴子の火床は、以前のようには潤いに満ち溢れては来ず、内襲も哲太郎の玉茎を締め付けて来ず、ぐったりなつた冴子を抱えながら空しく摺動を繰り返して頂点に達して独りで精を噴射するしかなかった。

冴子は、内縁の夫との間の永年の熱情に欠けた夫婦生活の間に、すっかり性的に無関心になり、不感症ともいえるほど精神的にも肉体的にも気の昂ぶりの低い状態になつていようだった。

哲太郎は、冴子の中に入ったまま、冴子を抱き締めて身体中を擦り続けたが、冴子は一向に反応してこなかった。冴子の反応のないまま、哲太郎は独り摺動運動を繰り返し、溜

りに溜った精を噴射して、さしもの玉茎も萎えたところでようやく冴子の中から出た。それは、さながら木偶でくを相手に行った独り善がりの自慰にも似た性行為だった。

哲太郎は、期待したような冴子の反応が得られず、もどかしい思いで冴子を見詰めるばかりだった。永年の習慣からか、ことが終ると、冴子はもう哲太郎に関心を示さず、哲太郎が冴子を抱きかかえて、その身体中に接吻し、撫で擦り、小核や空割を吸い続けても、冴子はただそれに身を任せているだけで、積極的に応えようとはしなかった。

今の冴子は、曾て哲太郎が「俺の雌型だ…」と云った冴子とは全く違っていた。十七年と云う時間の経過が、これほどの変化を人にもたらすのだと云うことを哲太郎は改めて思い知らされた。

「恐らく、冴子は冴子で、同じような変化を俺の中に見ているのかも知れないな…」
哲太郎は頭の中で独語ひとりごとちた。

「十七年という長い間、冴子を放っておいた当然の報いを今受けているのだ…」
昔のように新鮮な感覚で接しられるように二人の間柄を修復するには、長い時間が掛かりそうに哲太郎には思えた。

「ご免なさい、哲太郎…、私はもう、昔の私ではないわね…」
哲太郎の訝る気持ちを察して、冴子はほつりと云った。

「全ては俺のせいだ…、悪いのは冴子じゃあない…、責められなければならないのは俺の方だ…、「人は皆時と共に変わる…」ということを俺は計算に入れていなかった…、ただひたすら、「昔のままの冴子が俺を待っていてくれる…」と、浅はかにもそう思い込んでいた…、

お前も、俺の中に全く違つた哲太郎を見ているのだろう…、だから、素直に昔のように俺を受入れられないのじゃあないか…、

俺としては、大いに悔やまれるが、過ぎたことを悔やんでばかりいても仕方がない…、二人とももうそれほど若くもない…、だから昔に戻ろうとするのではなく、これから二人で共同の人生を築いて行こう…、承知してくれるな、冴子…、これまでのことは、後で寝物語で話す…、いいな、冴子…、

冴子は、相変らず黙つて、哲太郎を眺めて話を聴いているだけだった。

哲太郎が冴子の身体を拭いてやり、さちの使い残しの有り合わせの下帯と浴衣を出してきて着せてやり、自分も浴衣に着替えたところで、隣の旅館から仕出しが届いた。

二人は、どうしても拭い去れない気まずさの中で仕出しの料理を食べ了えたと…、ことさらにすることもないまま、床を延べて、添い寝した。

哲太郎は、冴子を自分の内懐に掻き抱きながら、これまでの一部始終を話した。

偶然に出逢った自分より十五歳も年上のさちと云う女がいて、十四の時に初めて性愛を教わり、それ以来ずっと「世の仲」のこと、料理のことやその他の人生の様々なことを教わり、冴子との初めてのことがあつた時には既に切つても切れない関係になつていたこと…、

そのことを冴子に話せば、冴子が傷付き悩むだろうと思つて何も話さなかつたこと…、

高校を卒業した年に、そのさちが近くの同じ生業なまひをする女将にたつた一つ手掛かりを残して行つた以外、何も言わずに佐久の町を出ていつてしまつたこと…、

納得がいかが気が狂つたようになり、高校を卒業すると、残されたたつた一つの手掛かり「南伊豆の方に行く」と云う言葉を頼りに南伊豆に行き、その割烹料亭の板前見習いになつてさちを探し始めたこと…、

三年の月日が経つて、もう諦めかけていた時に、下田と南伊豆の境にある田牛とうじという鄙びた田舎町で、ようやくさちに再び偶然に出会えたこと…、

その再度の出逢いが宿世の因縁のように思われ、入籍こそしなかつたけれども、それ以来ずっと夫婦も同様の生活を送り、お互いに助け合つて生きたこと…、

その生活は長くは続かず、その再会から五年ほどしてさちが子宮頸癌に冒されていることが判り、二人の必死の闘病生活が始まつたこと…、

その必死の努力も空しく、発病から五年目の春にさちは哲太郎を独り残して、この世を

去つて往つてしまつたこと…、

それから三年、さちの三周忌の法要を終えて、ようやくさちとのしがらみから抜け出し、冴子との約束を果たしに佐久に戻り、今こうして冴子を抱えていることなど、その後の来し方を話し、哲太郎は、冴子をひつしと抱き締めた。

冴子は、何も云わずに哲太郎の話を聞きながら、哲太郎の分厚く幅広い胸板に取り付いてさめざめと泣いていた。冴子は、そのさちと云う女と哲太郎の間には冴子が割り込める余地はなく、冴子が山県の家^の理不尽なまでに阻害された生活を強いられなければ、再び哲太郎の胸に取り縋ることはなかつたのだと判つた。ただ恨むらくは、哲太郎がもっと早く事実を話していてくれさえしたら、もつと別の人生を自分で決めて歩けた筈だと冴子には思えた。

哲太郎の約束を信じて、哲太郎に頼り切ろうとしたばかりに、山県の家での生活をずるずると続けてしまつたことも、冴子には悔やまれた。

哲太郎と冴子の間には、埋めることのできない暗く深い淵が口を開けているように見えた。だが、拍子のようにして哲太郎に従いて山県の家を飛び出してしまつた今となっては、もう後には引けなかつた。山県の家での長く続いた受け身の生活の中で、独り生きて行けるだけの能力も一つも付けていなかつたので、冴子は、何処までも哲太郎の後に従い

ていくしかなかった。

哲太郎の話から、哲太郎がこの十七年の間、喜びと悲しみに彩られた、随分と充実した「人らしい」人生を送っていたことが見て取れた。それに引き換え、冴子は、役所勤めと、山県の家での「内縁の妻」という、何れも受け身の、中身の充実しない人生を過ごしてしまっていた。冴子は、心身共に疲労感だけを蓄積させて、徒に歳を重ねてきたことこそ返すがえすも取り返しの付かないこと……と思われ、悔いた。

哲太郎は、話し終えると、何も言わずにたださめざめと泣いている冴子を更に強く抱き締めて、顛顛から、額、頬から口元へ、更に喉元へと唇を這わせて、冴子の背筋から尻を経て太股へとひたすら擦り続けた。

冴子は、ただ哲太郎の為に任せた。冴子の下腹には、哲太郎の怒張した玉茎たまぐさが押し付けられて、冴子に何かを促すかのように蠢いていた。…が、冴子は無反応で、たださめざめと泣くだけだった。

「それほど冴子は傷付いているのか…、何に…、受け身だった故の不運な人生にか…、俺が何も報せずに長い年月放り出してきたことにか…、それもこれも含めて、冴子自身の身の不運にか…、

それにしても、何故その間に冴子は俺や内縁の夫を見限って別の人生を歩こうとしなかったのか…」

冴子の身の不運につまされながら、哲太郎の想念も千々に乱れた。

哲太郎は、冴子の泪を舐め取つてやり、次第に唇を下のほうに移していった。顎から喉元へ、喉元から乳房へ、そして鳩尾から臍の周りへ、更に額口の半丘の生え際に至つた。そこは、曾てのような薄い生え際ではなく、手入れもされず、お構いなしの猥雑な姿をしていた。そこから、冴子が如何に性愛に無頓着な夫婦生活を送つていたかが読み取れた。だが、哲太郎には、それを口に出して云うことは憚られた。冴子が生活の中でもつと性愛に関心を強めて、小奇麗で感度の良い反応をするように手入れをしない限り、無頓着な姿のままだろう…と、思われた。

冴子は、哲太郎の前に自分の裸をさらけ出して、哲太郎の成すがままに身を任せていたが、殆ど無反応だった。哲太郎が小核を口に含んで舌の間で転がした時だけ腰から太股にかけて僅かに震わせただけで、それ以上の強い反応は示さなかつた。淫液も漏れ出では来ず、空割も火床口も殆ど乾いたままだった。これでは性を交えても快感は得られず、むしろ情交が苦痛になるはずだ…と思ひながら、哲太郎は、なおも冴子の気を昂ぶらせようと空しい努力を続けた。が、やがてそれに倦んで、冴子と交接することなく愛撫を止めて、ただ冴子を抱きかかえるだけだった。

「どうしたんだ、冴子…、俺のことが嫌いになって、受入れられないのか…」
暫くして哲太郎は訊いた。

「そうではないわ…、ただ気持ちが昂ぶらなくて…、身体も反応しないの…」

「さつき、湯の中でもいやいや俺に抱かれていたように見えた…、俺は、何だか中途半端で、最後まで昇り詰められずに終わった…、それほどまでに、冴子が俺のことを恨んで、撥ね付けたがっているのか…と、思わずにはいられなかった…、

冴子は、俺を迎えに行つたことを喜んではいないのか…、だったら何故、俺の云うなりになって婚家を放り出して俺に従いて来たのか…、俺には判らない…」

哲太郎は自分の疑問を冴子にぶつめた。

「ごめんなさい、哲太郎…、私は、山泉の家での中途半端な内縁の妻の生活の中で、こんな風に反応の鈍い女になってしまったんだわ…、

哲太郎が一生懸命私を愛してくれているのに、私の体の方がそれに従って行けないのよ…、

山泉の家で、八年近くもの間自分を殺して生きてきたせいかも知れないわ…、

哲太郎がいつまでも迎えに来てくれなかったからといって、それは哲太郎のせいではないわ…、山泉の家に足入れ婚をしたのは私自身だもの…、

そんな気の染まない生活をずるずる八年の間続けたのは、私自身よ…、もつと早く婚家を出ていれば良かったのに…、世間体や両親の立場を気にして、煮え切らない生活を続けてしまったのよ…、

たつた一つの願いが、哲太郎が飛んで来てくれて、以前のように強引に私をそこから連れ出してくれることだけだったのよ…、

そして、やつと哲太郎が飛んで来てくれて、私を山県の家から連れ去ってくれて…、嬉しくない筈はないのに…、身体も心も無感覚で、無反応なまま…、私にはどうにもならない状態なのよ…、

さつき、哲太郎のこの十七年間の話を聞いていて、私は羨ましかったわ…、そのさちさんという女性のことだけでなく、哲太郎のこともよ…、

哲太郎がそんなに夢中になって探して、そんなに全身全霊でその女性の命を助けようとしたと云うことは、それだけ沢山の幸せをその女性から貰って、満ち足りていたからだよ…、亡くなったさちさんもきつと幸せで満ち足りて、女として輝いていた筈だわ…、

十七年前に、哲太郎は、私のことを「俺の女だ…」と云ってくれていたけど、違つたのよ…、だって私は、あのまま人生から殆ど何も学ぶことなく、ぼやけたような人生を送つて…、さちさんのように哲太郎が満ち足りて幸せに思うほど、何かを哲太郎に上げられないもの…、私は何もかも受け身のまま、ただ哲太郎を待つていたんだわ…、

十七年間は、哲太郎とさちさんにとつてはさほど長くはなかつたかも知れないけれど…、幸せが一杯詰まって充実した人生だった筈よ…、

だから私は、二人が羨ましい…、ただ羨ましいだけでなく、嫉妬心を感じるわ…」

そう云つて、冴子は、一息吐いた。哲太郎は、そんな冴子の述懐のような話しに何も口を挟まずに、冴子を撫で擦りながら、黙つて聞いていた。

「仮に、仮によ…、哲太郎…、もつと早く哲太郎が私を迎えに来てくれたとしても…、私は、さちさんのように充実した沢山の幸せを哲太郎に上げられなかつた筈だわ…、

直ぐに底が見えてしまつて、哲太郎の方が私に飽きてしまつていた筈だと思つて、そんな思いも私が哲太郎に腰が引けている理由かも知れないわね…、

これから私が努力したとして…、私は哲太郎に何をしてあげられるのかしら…、亡くなつたさちさんの前で、私は女として、人として、完全に後れを取つてゐるのを感じるわ…、そこまですつて、冴子はまた口を噤んだ。

「そんな風に思ふ必要はないよ、冴子…、冴子は、以前のように飾らずありのままの冴子でいてくれればいいんだよ…、それで俺は十分満足だ…」

後一日ここで休んで、少し冴子の気持ちちが落ち着いたら、南伊豆に行つて、新規巻直し

で二人の生活を築いていこう…、さちも、「私のことはできるだけ早く忘れて…」と云つて、俺が後ろ向き的人生を送らないように願つてくれていた…、俺はそうすることがさちへの一番いい供養になる…と思つているからな…、冴子も、時には俺の周囲にさちの存在を感じることもあるかも知れないが、それは気にせずと、いつも前向きに俺との充実した生活を楽しんでくれ…、それが一番の俺の願いだ…冴子…、」

そう云つて哲太郎は、また冴子を固く抱き締めた。

お互いに思つて話を話したので、冴子の気持ちは大分落ち着き、いつしか哲太郎の懐に抱かれたまま深い眠りに落ちた。哲太郎も自分の怒張した玉茎を冴子のすべすべした太股の間に挟んで冴子の寝息を聞いているうちに寝入った。

明け方、哲太郎は鮮やかに記憶に残る夢を見た。それは、あのさちとの再会の後の情交で、二人とも番がったまま眠りに落ち、夢を見て溜りに溜つた多量の精を爆発させた時と同じ夢だった。

哲太郎は、目覚めて直ぐに実際に夢精を見たことに気付いた。発射された精は夥しい量だった。冴子の下腹の生え際や太股や下帯が哲太郎の精でまみれていた。

冴子は、哲太郎の発射した精の刺激の強い栗の花の匂いで目覚め、自分が哲太郎の精で

塗れているのに気付いた。そして、哲太郎の玉茎が自分の太股の間でなおも怒張を続けて盛んに蠢いているのを知った。

哲太郎は、再びあの時と同じ夢を見て精を放ったことに怪訝な思いに囚われた。そして、冴子を精塗れにしたことで、確実に一步冴子との関係が昔に戻った……と、思い、二人がもつと全身精塗れになりたいという奇妙な願望に囚われ、冴子の尻と太股を抱え込んで、素股で摺動運動を繰り返して、何度も絶頂に達して大量の精を発射し続けた。

冴子は、哲太郎の行為が通常的情交で哲太郎を満足させられなくなっている自分の精神的肉体的な状態のせいだと思い、「哲太郎、ご免なさい……」と云った。

「さあ、冴子……、こうしてお前を俺の精塗れにさせたから……、これでお前はまた一步俺の女に戻ったぞ……」

哲太郎は冴子の思いとは全く別のことを云った。

「男にはそんな願望があるのか……」

冴子は、哲太郎の云ったことを訝った。

二人が精塗れになつて抱きあっているうちに、また二人は微睡んだ。次に二人が目覚め

たのは、陽が高くなつてからだつた。

哲太郎は、いつまでもそんな姿勢で横たわっているわけにもいかないと思ひ、冴子を抱え上げて座敷の内風呂に連れて行き、湯の中で互いに撫で擦り合いながら身体を清め、冴子にもう一枚残っていた真新しい浴衣を下帯なしで着せて、自分は汗臭い服に着替えて隣の旅館に行つて仕出しを頼んでから、車の手入れをした。

冴子は、この時初めて自ら主婦らしい役割を果たして、浴衣一枚の裾が割れて内股の奥が覗けるのも構わずに、汚れた衣類やシーツを洗濯して、屋内の物干しに掛けた。

仕出しの料理を食べた後、哲太郎は、給油を兼ねて冴子を荏崎まで連れて行き、二人の必要な衣類を買い整えて戻り、夕食に再び隣の仕出し料理を頼んで、後はまた、無理に精を交えずに、露天風呂で裸で抱きあつて時を過ごした。

その時冴子は、初めて哲太郎が生え際の毛を刈り込んでいるのに気付いた。そして、自分の生え際は「手入れされずにむさ苦しい」と覺り、そのような気配りをする生活をして来なかつたことを悔いた。だが、「普通の主婦は、それで当たり前……」なのではないかとも思ひ、いつも性的なことに気を回していることに氣恥ずかしさを覺えることも事實だつた。

何れにせよ、ようやく哲太郎と再会できてその腕の中に抱えられているというのに、今のような氣の晴れない鬱屈した氣持ちになつている状態から抜け出るためにも、意識して

自分の秘所を身ぎれいにしておく習慣を付けるのも良いのではないかと、冴子は自分を納得させようとした。

その翌日、幾分か冴子の気持ちが和らいで、打ち解けた状態になったと判断して、哲太郎は、冴子を南伊豆の自宅に連れて行くことにした。

増富から南伊豆の下賀茂までの道は、曾てラジウム温泉療法のために、毎週末さちを連れて通い慣れた道だった。それでも、朝の内に増富を出ても、下賀茂に着いたのは、もう陽がとつぷりと暮れた八時過ぎだった。

道中、哲太郎は、行き先の場所について冴子に詳しく話して聞かせた。増富でも、さちの位牌の入った厨子やさちの遺品のある仏間があり、さちの影が色濃く残っていたが、行く先の家も、さちの経営していた小料理屋「さち」の二階だと云うことで、冴子はさちの影がしっかりと残っていることを覚った。

増富の家の仏間に飾つてある写真を見て、冴子は、哲太郎がさちの後を追つて南伊豆まで行つて探し回つた理由が分つた気がした。

濃化粧をしていないにも拘わらず、さちは艶やかで美しい姿をしていた。そのうえ人生経験や知識が豊かだ……とあれば、「普通の女はとも太刀打ちできない……」と、思えた。殊に、抗癌剤のために髪の毛の抜け落ちたのを隠すために始終着けていたのだという島田 齧のカヅラを着けた和服姿のさちが、あどけないまでに屈託なく微笑んでいる若々しく艶やかな美しさを見て、冴子は自分自身がみすばらしい女のように感じた。そのように云うと、哲太郎は、「そんな風に自分を卑下する必要はない……」と云つたが、そこに現れている「女の……」は、厳然たる事実として、十分な説得力を持つて冴子に突きつけられていることは抗いようもなかった。

「そんな風に云うと、俺の冴子に対する気持ちや疑うことになる……」

だいいち、さちはもうこの世には居ないし、俺の気持ちや吹っ切れたからこそ冴子との約束を果たすために迎えに行つたことまで疑うことになる……

そんな風に斜に構えて俺のことを見ないで、もつと素直に俺を受入れられないのか……

冴子がそのように、さちの前で自分の気後れする理由を話すと、哲太郎は無然として云った。

「素直になりたくともなれないわ…、さちさんは未だ哲太郎の心の中に住んでいるわ…」

「いや、さちはもう俺の心の中に住んではない、残っているのは過ぎし日の良い思い出だけだ…、

これからは冴子との間に良い思い出を作っていこうと俺は思っている…、その思い出が多くなればなるほど、さちとの思い出は遠くなつて、小さくなつていくんだ…、

そんな風に僻んでばかり居ないで、冴子自身が自分から進んでおれとの思い出を大きく育てるようにしてくれないか…、

もつと前向きになつてくれ…、以前の冴子は何処へ行つたんだ…、何もかも後ろ向きにしか見ていないじゃあないか…、

八年もの間の婚家での生活の中でそのような姿勢が身に付いたのかも知れないが…、冴子が元の冴子に戻るには、俺が冴子を迎えに行つて、冴子が今俺の隣に居るといふ事実、だけで十分な筈じゃあないか…」

「そうだね…、哲太郎を怒らせてしまつて…、ご免なさい…、これからは、哲太郎と一緒に生活することに一生懸命になるわ…、そうすれば、私もまた元の私に戻るかも知れないわね…」

「当然だよ、冴子…、これからは、毎日一緒に生活するんだからな…、さちの影がどこかにあったとしても、そんなことは気にしないで、昔の冴子のようにおおらかな気持ちでやり過ごしてくれ…、それが今の冴子に対するたった一つの願いだ…」

「そのように努力するわ…」

「うん…、ま…、こんな風に言い合いをしたのは初めてだが…、冴子が俺と言い合いすることができたことが、この三日の間の進歩だな…、何れにしても、下賀茂に行っておれと生活するようになれば、冴子は否が応でも板前の女房で、今、よねさんという女将が取り仕切ってくれている小料理屋「さち」の差配の仕方をよねさんから教わりながら、若女将として切り盛りしていかなければならなくなる…、小さなことにあれこれ拘っている暇はなくなるよ…、これからは、冴子がさちの代わりになつてくれなければ困る…、いいな…、冴子…」

冴子は、哲太郎と言い合いをしてまた少し気が晴れて、黙つてこくりと首肯した。

車は、三島から伊豆長岡を経て天城を縦断する下田街道の葛折れの狭い道を二時間ほど走つて下田に入つてから三十分余りで下賀茂温泉の哲太郎の住いに着いた。

冴子を二階の部屋に案内して、冴子に内湯の温泉に浸かってゆつくりするように云つて

から、「さち」の店に顔を出して、よねに戻ったことを知らせ、直ぐに金田中下賀茂店に行き、板長代理のサブに戻ったことを知らせて労いの言葉を掛け、仕出しを二人前届けてくれるように頼んで部屋に戻り、「金田中」の女将の八千代と板長の正造に電話で戻って来たことを報せた。

部屋に戻ると、冴子は湯から上がって、葦崎で買い整えた浴衣に丹前を羽織って、鏡台の前で髪を梳き調えているところだった。

「腹が減つたらう…、今「金田中」の飛びきり旨い仕出しを頼んできたからな…、四畳半の棚にある茶菓子でも食べて、もう少し辛抱して居てくれ…、その間に俺も一風呂浴びて、汗と埃を流してくる…」

そう云って、哲太郎は、露天風呂のような造りになってゐる湯殿に入って行つた。

哲太郎が湯から上がって暫くして、仕出し料理が届いた。

「どうだ…、見るからに旨そうだろう…、うちの料理は、石廊崎周辺で獲れた魚を主材にした料理だから、「新鮮で飛びきり旨い…」と、評判をとつてゐるんだ…、佐久や南佐久のような山家では食いたくとも食えないものだ…、特にうちの店の料理はびか一だ…」

哲太郎は自画自賛しながら、大口で料理を平らげていた。実際に冴子もこんな旨い料理は食べたことがなかった。

「疲れたから先に寝かせていただくわ……」

遅い夕食が終ると、冴子は口を濯いでから寝間に引き取った。

「俺も後を片してから行く……」と云つて、哲太郎は仕出しの食器を洗いにお勝手に立った。板前をしている哲太郎には、こういうことが苦にならないのだった。

冴子が床に就くと、下の店の方から誰かが爪弾く三味線の音が微かに聞こえていた。こういう雰囲気も、冴子には想像もつかなかつた世界に身を置いていることを気付かせた。

冴子がうとうととしかし掛かつた頃に、寝間着に着替えた哲太郎が冴子の後から添い寝してきて冴子を抱きかかえた。哲太郎の玉茎は、当然のようにおえ立っていた。だが、冴子は一向に兆している様子がなく、哲太郎に背を向けたままだった。

哲太郎は、冴子を抱えて冴子を自分の方に向き直らせ、冴子の寝間着の裾から手を挿し入れて冴子の尻を抱えた。冴子は、今時の若い女には流行らない厚手の下履きを履いていた。下履きは、冴子の尻をすつぱり包み込んでゴム紐が腰の括れのところまで達していた。哲太郎は、ゴム紐に指を挿し入れて、下履きを脱がせにかかった。

「ご免なさい、哲太郎……、今日もそんな気になれないわ……」

冴子は聞のことを拒んだ。

「判っていたよ……、それでもおれたちの間に垣根のように立ちはだかるようなものがあ

るのは良くない…、俺はいつも冴子と肌と肌で触れあっていたい…」

そう云つて、哲太郎は強引に冴子の下履きを引き下げて脱がせ、冴子の太股の間に自分のおえ立った玉茎を挟んで、冴子の尻を自分の方に引き寄せ、そのまま冴子を強く抱き締めた。哲太郎のおえ立った熱い玉茎が脈動して、冴子の空割の襷を軽く小突くように打ち続けた。

玉茎の刺激で、冴子の身体が少し反応をし初め、少し湿り気を帯びて来た。哲太郎は、腰を前後に動かしながら、玉茎で空割の谷間を擦り出した。そして、小核の辺りに雁首がせり上がってきたら、そこに雁首で微細な震動を加えた。その雁首の刺激で、冴子の小核が勃起し、冴子は初めて反応して、「あああ…」と声を上げて、腰を震わせ始めた。

その冴子の様子から、哲太郎は、冴子の気を昂ぶらせることができるかと判断して、冴子を抱えて仰向けになつて冴子を自分の腹に乗せ、冴子の尻を抱えて前後に動かしながら玉茎の腹で冴子の空割の襷を撫で擦り続けた。

哲太郎の玉茎の摺動の刺激で、冴子の気持ちの中の緊張が解れ、快感らしい感覚が背筋を走つて、冴子は哲太郎と再会して初めて火床口から淫水を漏らした。

淫水よつて滑らかなになつた玉茎の動きで、冴子の気が更に昂ぶつて来て、冴子は思わず衣を裂くような声を上げて、哲太郎の肩にしがみ付いた。

ここまで来れば、もう冴子の心の垣根は取り払われたも同然だった。

哲太郎は、両膝を立てて冴子を抱え上げて雁首の先を冴子の火床口に当てる腰を突き上げて挿入を果たした。後は成り行きだった。

摺動を繰り返す哲太郎の雁首の鰓の刺激で火床の内壁が膨らんで更に感度を増し、冴子は悶えるように身をくねらせ、頂上を極めて、「ああっつ、もう死ぬっ…」と叫んで、ぐったりとなって哲太郎の腹にへばり付いた。哲太郎は、その冴子の感情の昂ぶりに合わせて動きを早め、冴子に合わせて頂上に達して、どつとばかりに二度三度と精を噴射させて、共に果てた。

「これでようやく元の二人に戻れそうだな…」

哲太郎は、冴子の身体中を撫で擦り、頬や項や喉元に接吻をして慈しみながら冴子の耳元で囁くように云った。

「また、哲太郎が強引に私を開いてくれた…」

哲太郎の声を何処か意識の遠くから聞こえて来る声のように聞いて、冴子は、心の中で呟いた。

哲太郎は、完全には満ち足りてはいなかったが、冴子が慣れない長時間の車の旅で疲れていることだし、「無理はすまい…」と自分を戒めて、後始末をして冴子と抱き合って眠った。

夜が明けて、車での長旅と思わず頂上に達することのできた哲太郎との性愛の満足感で熟睡して、雀たちの啼く声で冴子は爽快な気分で見覚めた。

哲太郎との心の垣根が薄れて、冴子は、ようやく哲太郎への愛おしさが込み上げてきて、思わず哲太郎の肩口に顔を埋めて首筋を吸った。思えば、これが哲太郎との初めてのまともな閨の褥の中での性愛だった。

「どうだ、良く眠れたか…」

哲太郎は、冴子が首筋を吸う唇の刺激で見覚め、冴子を抱きかかえて微笑みながら訊いた。

「……」

冴子は微笑み反して、黙って首肯した。

「さあ、それじゃあ、今日は午前中に南伊豆町の「金田中」本店に行つて、女将と板長に挨拶して、自分の間仲間見習いをさせてもらうように頼むでしょう…、冴子には、こういう水商売の仕来りや作法に慣れてもらわないといけないからな…、」

その後、俺が仕切っている「金田中下賀茂店」に行つて、板前や仲間達に引き合わせてから、最後に此処に戻つて来て、「さち」の女将のよねさんや他の仲間達に冴子を紹介し

よう…、何れは、冴子が「さち」を切り盛りして行かなければならぬからな…、よねさんからいろいろ教わらなければならない…、

それが済んだら、下田に行つて、和服を何着か買つてこよう…」

その日の予定を話すと、哲太郎は、冴子を抱えて内湯に入り、身を清めてから、着替えて外に出た。「さち」は、まだ店を開けていなかった。

「金田中」では、八千代や正造や志津を初め、みんな哲太郎が水商売にはずぶの素人の女を連れて戻つて来たのを見て驚いた。

哲太郎は、そんなみんなの思いには頓着せずに金田中で仲居見習いとして水商売の世界の仕来りや作法を教えてやつて欲しいと八千代に頼んだ。

八千代には、事情を話して、当分入籍はできないけれども、「俺の女房として何れは「さち」を切り盛りさせるから…」と云つて、そのつもりで「水商売のいろは」を仕込んで欲しいと頼んだ。

八千代は、冴子が既に三十五歳になっていて、田舎町で八年もの間内縁の妻として、どつちつかずの生活を送っていたことに難があると思つたが、他でもない哲太郎の強い思い入れによる頼みとあつて、不承不承ながら引き受け、「明日と云わず、今日の夕方から来ておくれな…」と云つた。

「哲ちゃんが遠い昔に冴子と別れたままにしておけば良かったのだ…」
八千代は内心そう思つた。

「さちさんとのことは良く解るがねえ…、今度の女性は何処が良かったのかねえ…、とかく男と女の間のこととは当人同士にしか解らないもんだ…」

八千代は、頭の中で呟いた。

「金田中下賀茂店」でも「さち」でも、みんな似たり寄つたりりの反応を示した。冴子はまだ十代だったから、みんな違つた反応を示したに違いなかつたが、「冴子の年齢と雰囲気」が水商売にこれから入るには向かない…、と思われた。

哲太郎にもそれは判つていた。冴子もそれを自覚して、困難を乗り越えて、「水商売に染まつて」くれることを願うしかなかつた。

そしてその願いを冴子に話して、「俺はあくまで冴子を支えて行く…」と誓つた。

冴子は、自分が適所に居ないことは、最初に哲太郎から話しを聞いた時から解つていた

し、実際に来て見えますますその感を強くした。が、今更後には引けない事情がある以上、哲太郎の支えを頼りに、自分を励まして、自ら変身し切るしかなかった。

「元々何でもなかったのだし…、どんな世界に入ったって、その道の素人でしかないのだから、とにかく始めて、辛抱するしかないわ…、」

人がやれることなんだから、私にやれないとは云い切れないし…」

冴子は自分の気持ちを奮い立たせようとした。

「それに、哲太郎に頼ってばかりいなくて、自分が人生のいろんなことを覚えて、もつと強くなつて逆に哲太郎を助けてあげられるようにならなければ…、まだ入籍していなくても、今度こそ真正正銘の夫婦なんだし…」

冴子は自分の立場の自覚を自分に促した。

日をおいて二人は、金田中の女将の八千代と板長の正造を立会人として吉佐見神社で形ばかりの祝言を挙げたが、婚姻届を出すのは先送りにした。

冴子が正式に妻として入籍していなかったとはいえ、突然出奔する形で山県の家を抜け出したために、ほとぼりが冷めるまでは郷里の佐久からおいそれと正面切つて戸籍謄本を取り寄せることはできかねたからだ。厳格な父に知られたら、どんな結果になるか知れないと思ひ、冴子は母親の志乃にも居場所を知らせられなかった。

こうして、哲太郎と冴子の変則的な夫婦生活が始まった。子供ができたわけでもないの
で、取り敢えずは哲太郎の籍に入ることは冴子には問題にはならなかった。

金田中での仲居見習いの修業は、決して楽ではなかったが、哲太郎に毎日車で送り迎え
してもらえ、哲太郎の大きな体に「包まって」眠り、いつも哲太郎に寄り添って暮せるだ
けで、冴子は十分に幸せだった。

それから半年が経ち、梅の花と桜が同時に咲き競う三月の二十三日、奇しくも彼岸の中
日に当たるさちの命日に哲太郎は冴子を連れて田牛とうじの長谷寺ちやうこくじに行つてさちの墓前に冴子と
の婚姻を報告した。久方ぶりに顔を合わせた住持は、哲太郎が妻を迎えたことを喜んだ。

「恐らくさちさんも喜んで居られるじやろう…、さちさんは生前からそのようなことを
云つて居られたからのう…、それに残された者が生き生きと生活していることを知らせる
のが仏への何よりの供養じやよ…」

住持は二人を代わる代わる眺めながらそう云つた。

それから更に半年が経ち、佐久から姿を消して一年目に、冴子は恐る恐る実家に電話を
入れた。

昼日中の時間帯だったので父親が応答せずに母親の志乃が出てくれることを予測して応答を待った。だが三分近くも待つて誰も応答しないので、「留守だ……」と思つて受話器を置こうとした瞬間にカタリと、受話器を取り落とす音が聞こえた。

それで、「母だ……」と思い、直ぐ掛け直した。

今度は間を置かずに志乃が出た。

「お母さん……、冴子よ……、お父さんに気付かれないように話してえ……」

冴子はくぐもつた声で云つた。

「冴子……、冴子なのっ……」

冴子の願いも空しく、志乃は金切り声を上げて、叫ぶように電話の主を確認しようとした。た。

「そう、冴子よ……、お父さんに気付かれないように話してえ……」

冴子は慌ててもう一度念を押すように云つた。

「お父さんは今家には居ないから安心しなさい……、あなた、今何処から掛けているのっ……、あなたが突然居なくなつて……、山県の家からは散々悪く云われるし……、父さんはかんかんになつて怒るし……、世間には顔向けならなくなるし……、随分肩身の狭い思いをしたんだよっ……、今何処で何をしているのよっ……、

一時は寝込むほど随分と心配したのよっ……」

志乃は畳みかけるように話した。

「ごめんなさい、心配掛けて…、まだ何処に居るか云えないけど…、私はずっと元気にしてたわ…、詳しいことはもつと後で…、そう、もつと年月が経つてから話すわ…、取りあえず今日は、私が生きていて、元気に…、幸せに暮していることをお母さんだけに知らせたくて電話したのよ…、

こんな仕方を選んだ私のこと…、許してえ…、それで、お母さんは元気なの…」
冴子は涙声になつて、途切れ途切れにせつつくように話した。

「私は、さつきも云つたように、あなたが居なくなつてから暫く寝込んだけど…、あなたが無事なことだけを祈つて、稲荷神社にお百度参りをしてから元気になつて、今は風邪一つ引かないほど達者だよ…、それよりねえ…、最近になつてお父さんが「体調が悪い…」と云い出してね…、検査のために入院しているのよ…」

「それなら尚更お父さんには私のことを話さないでえ…、お母さんが元気だと聴いて安心したわ…、

私はさつき云つたように元気で、多分お母さんも知っている男性おとこと幸せに暮しているから…心配しないでね…、また時々電話をするわ…、これで電話を切るからね…、さようなら、お母さん…」

志乃は哲太郎のことは知らなかったが、冴子は母を安心させるために口から出任せを云

って電話を切った。

なろうことなら、すぐにも飛んで帰って、母に姿を見せて安心させたかったが、今は自
重しなければならぬと思ひ、じつと堪えた。

「お義母さんはどうだった…、元氣だったか…」

哲太郎は、帰ってくるなり訊いた。

「ええ…、私が居なくなつて暫くは寝込んだらしいけど、今は風邪一つ引かないほど達
者だつて…、ただ、お父さんは体調が悪くて検査で入院しているんだつて…」

「そうか…、お義母さんの方は安心だが、お義父さんの方は心配だな…、大事がなけれ
ばいいが…」

哲太郎は、検査入院をしてすぐ大手術をする羽目になつたさちのことを思いだしながら
付け加えて云つた。

「今度折りを見て俺が実家に帰つて、密かにお義母さんを訪ねて詳しく聞いて見ようか…」

「止めて頂戴つ…、何が因で騒動が蒸し返されないと知れないから…、私が時々お母
さんに電話を入れるだけで十分よ…」

「そうか…、冴子が嫌なら仕方がない…、俺はいつでも大つびらに実家に帰れるし…、白
つとほけて様子を探ることもできるから、いつでも云つてくれ…」

「頃合いの時が来たらね…」

だが、それから三月立って、温暖な南伊豆でも師走の冷たい風が吹く頃になって、また金田中に重大事が起こった。

女将の八千代が唯一頼りにして元気の塊みたいだった板長の正造が突然脳内出血を起こして、そのまま帰らぬ人になってしまったのだ。いつものように正造が仕事から上がって一風呂浴びた後の八千代との房事後、眠りに就いて直ぐの真夜中のことだった。

八千代は狂乱状態になって急いで近くの診療所の医者の往診を頼んだが、十五分ほどして医者が来た時には、正造は既にこと切れていた。

八千代は、暫く茫然自失の放心状態で涙も出さずにただ正造の胸板に取り付いていた。だが、そんな状態が続いて小一時間も経った頃に、八千代はいつもの気丈さを取り戻して、直ぐに哲太郎に電話を掛けて急を知らせた。

哲太郎は、寝入り端に叩き起こされるようにして急な知らせを聞き、冴子に一言知らせて直ちに行動を起こした。

直ぐにサブに電話を入れて急を知らせ、金田中に行くように云い、金田中の八千代の居宅に電話をして、志津と葬儀社に電話をしたかどうかを確かめ、もつと人手が要るかどうかを訊いた。

流石に世慣れた八千代は、志津にも葬儀社にも連絡をしていた。

哲太郎は、念のためよねにも電話で知らせて、金田中に応援に行ってくれるように云い、冴子には寝ているように云って、金田中に車を飛ばした。

金田中の八千代の家に行くと、八千代は、氣丈に堪えていた悲しみと行く先の不安がどつと吹き出たのか、哲太郎を見るとその胸にすがって大声で泣いた。

哲太郎は、八千代の肩を軽く叩きながら暫く泣くに任せたが、やがて八千代を促して正造の横たわる間に案内させ、正造の枕辺で手を合わせて冥福を祈り、取りあえず明日からの金田中の営業をどうするかを八千代に訊いた。

そこへ葬儀社がやって来て、お寺さんやら葬儀の格式やら段取りやら細かい手筈について八千代と相談して、概略話が付いたところで一先ず準備のために帰って行つた。

それから程なくして、サブや志津、よねが次々にやって来て、それぞれ八千代と相談し

ながらてきばきと必要な準備に取り掛かった。

「本店も支店も営業は休まずに続け、本店の板場は俺と秀次と正平の三人で切り盛りして、さぶに支店の板場の責任を持たせ、石廊崎魚市場の鮮魚の仕入れは俺とサブが行くようにしましよ……」

哲太郎は、八千代がただ悲しんでいるよりも、金田中の経営第一に忙しく働いている方が女将のためにもいいと考えて提案した。

八千代は哲太郎の意図を察して頷き、板場の方は哲太郎の云う通りにして、座敷の方は四十九日の法要と納骨まで、出産の時と同じように仲居頭の志津に女将代行を勤めるように頼んだ。

「手が足りないようだったら、暫く「さち」の営業を休ませて、よねさん以下「さち」の五人の仲居を手伝いに来させましよう……」

哲太郎は付け加えて提案した。

そうこうしている内に夜が明けて、登校の仕度をした子供達が二階から降りてきた。

「お父さんが急に亡くなったのよ……、こちらに来てお祈りをしなさい……」

八千代は、涙声で云って、正造の遺体の前に子供たちを連れて行って座らせ、顔の覆いを取って二人に見せた。

二人は突然の父親の死が理解できない様子だったが、母親に云われるままに手を合わせ、朝食を摂り、事情を話して早めに帰してもらえるように学校に伝えるために従って行かせることにした女中の八重と連れ立って学校へ向かった。

そうこうしている内に八千代の居宅に葬儀社が再びやって来て、「お寺さんは真言宗の最福寺にお頼みしました」と云い、新仏の湯灌を済ませて祭壇を設えた。

一方、金田中の舗の方では、仲居や女中達、板前たちが次々に出勤してきて、大広間に集められ、八千代から聞かされた板長の急な訃報に触れてみんな驚きで固まった。

「お舗は閉めずに営業を続けますので、いつも通り働いてください…、夜に入ってから伽僧が来て宅の方でお通夜をしますが、仕事が終わってから供養してやってください…」

八千代はみんなの不安を察して云った。居宅の方は二重三重に高い生け垣で遮られているため、舗の玄関側からは見えないようになっていたが、高張提灯なども控えめに立てるように葬儀社に頼んだ。

八千代は、一家の主人の死に相応しく、盛大な葬儀を営んでやりたいと思ったものの、割烹料亭「金田中」の経営があることを思うと、それも憚られるため、万事略式にして、客の居ない平日の昼日に葬儀を行うことにし、その通りに事が運ばれた。

よねをはじめ正造と直接関わりのない「さち」の仲居達に金田中の留守を頼んで、三日

後の日中に居宅で葬儀を行い、町営の火葬場で茶毘たびに付し、帰宅して仏前で初七日の法要をし、正造との永遠とわの別れをした。

その後八千代は、一回忌を兼ねた四十九日の法要と納骨までは喪に服して、一家の大黒柱を失った悲しみと先行きの不安に暮れる日を送ったが、それも済むと、また旧に復して氣丈に店の経営を取り仕切り出した。

そんな折りも折り、冴子が体調不良を訴え出した。哲太郎は、さちのことがあるので慌てて冴子を南伊豆病院に連れて行つた。結果は冴子の妊娠だった。

哲太郎は驚くと同時に大喜びした。

「高齢妊娠のため、冴子にも胎児にも悪い影響があつてはいけない…」

哲太郎は腫れ物に触れるようにして、冴子を労った。

「これで公然と父にも知らせられる…」

冴子はそう考えて早速実家に電話で知らせた。

「お母さん…、元気にしてらう…」

「ああ、元気だよ…、随分とご無沙汰だねえ…、こちらからは連絡のしようがないから気掛かりでならなかつたよ…」

「それで、お父さんの具合はどうなの…」

「一進一退のようだよ…、それで、あんたはどうなのかい…、元気なのかい…」

「ええ、元気よ…、ねえ、お母さん、聞いて…、私ね…、このところ体調が優れないので、お医者さんに見てもらつたらねえ…、赤ちやんができてるんだつて…」

三カ月ですつて、私は石女いしめづめじゃあなかつたのよ…、

「ええくつ、そうなのかい…、良かったねえく…、それで誰の児なの…」

「私が高校の時から好きだつた男性ひとの子よ…、今では大きな料亭の板前の頭よ、去年二人の勤め先のご主人夫妻に立ち合つてもらつて、近くの神社で二人だけの祝言を挙げたの…、戸籍謄本が取りづらくて婚姻届は出してないけど…、私、嬉しくつて…、嬉しくつて…、

気分が優れないのは悪阻つわりのせいなんだつて…、これで、お父さんにもこれまでのことを話して、許してもらえらと思うわ…」

「そうかい、そうかい…、本当に良かったねえ、冴子…、これで山県の家の人を見返せたねえ…、良かった…、良かった…、本当に良かった…、今日、病院に行つて、お父さん

に話すよ…、いいだろう」

志乃は、泪を噉りながら、おろおろ声で云った。

「本当なら、私の口から云つて、今までの非を詫びるのが筋なんでしょうけどね…、いわ…、事実だけを話してくれて…」

「戸籍謄本を取つて送るから、住所を教えて頂戴…、山県ん家の倅は後添えを貰つたつて云うし…、もうこそこそ隠れていなくてもいいだろう…」

「戸籍謄本は自分で郵送で頼んで取り寄せるから大丈夫よ…、でも近い内に気分の良い時にお父さんとお母さんには、手紙でこれまでのことを話して、詫びるつもりだから…」

「もう済んだことだし…、詫びてなんか貰わなくてもいいよ…、私は、とつくにあなたの気持ち解つていたわ…、お父さんだつて世間体があるから怒つたような振りしていただけど…、本当はあなたのことが気掛かりだつたんだよ…、しょつちゆう「冴子は何処でどうしているのかなあ…」つて、云つてたんだから…、

あなたが最初に電話してきた時に「元気で、幸せに過ごしている…」つて云つておいたから、二人でほつとしてたんだよ…」

「まあ…、「お父さんには話さないで…」つて云つておいたのに…、もう話していたの…、口が軽いんだから、お母さんは…」

それから暫くして、暮れも押し詰まって、冴子は実家に当てて手紙を書いてこれまでの一部始終を話し、同時に南佐久市の戸籍課から郵送で戸籍謄本を取り寄せた。明けて一月八日、哲太郎と冴子は揃って南伊豆町役場で婚姻届を出して、入籍を済ませた。

立春のころ正造の四十九日と一回忌の法要と納骨が済んだ後、哲太郎は、改めて冴子の妊娠の事実と、二人が婚姻届を出して入籍を済ませたことを八千代に話した。

「あら、そうなの、それはおめでとう…、それじゃあ、岩田帯でも贈ろうかねえ…」
八千代は、これまでになく冷めた目で哲太郎を見て云った。八千代のそういう冷めた態度は、金田中の板長になった哲太郎がもつと自分に近付いてくれることを内心期待したのに、逆に遠ざかって行くように見えることへの反発からだつた。

五十を過ぎたとは云え、容姿の美しさでは群を抜いている八千代は、まだまだ花も実もある「飛び切り熟れた女…」だつた。孤閨を託つにはまだまだ若過ぎた。かといつて立場上男漁りもならず、さりとて昵懇の常連客の中から誰か「良い旦那」を見付け出そうとするのも面妖なことだつた。

哲太郎が板長として金田中本店の板場を仕切るようになると、再び仲居達が活気を帯びてきた。

だが、曾てのように哲太郎が板長の手許を見ているか、命じられる雑用をする以外にすることもなかった時代と違って、哲太郎は早朝から深夜まで多忙を極めたので、哲太郎に雑用の手を借りて甘えかかるなどは望むべくもなかった。それに哲太郎には女房もいるし、その女房が身重ながら同じ座敷で働いているので、目を盗んで哲太郎にちよっかいを出すわけにもいかなかった。そんなわけで、仲居達の関心は若い板前の秀次や正平や、最近入って来た見習いの方に移って行き、お座敷と板場の接点になる配膳口では、始終若い男と女達のフェロモンが入り交じり、艶いて活気のある雰囲気醸し出され、みんな和やかに冗談口や軽口を云い合いながら仕事をすようになつた。

四月に入つて、妊娠七カ月になると、哲太郎は、冴子を金田中での仲居見習いの仕事から外させ、よねの切り盛りする「さち」の店で若女将として無理の掛からない仕事に就かせることにして、女将の八千代の承諾を得た。それは、八千代にとつては哲太郎に「隙」ができたことを意味した。そして、八千代と哲太郎が大人の男と女の関係になるのに多くの時間は要らなかつた。

「片が付いたら私の帳場に来て…」

その日八千代は、曾て正造との時と同じように、哲太郎が遅くまで独り包丁の手入れや翌日の仕込みをしている板場に来て一声掛けた。哲太郎もすでに予期していて、八千代の濡れて輝く目を見返して、静かに首肯いた。

「女将さん入ります…」

云いもつて、哲太郎が帳場に入ると、八千代は独り手酌で呑んでいた。

「まあ、そんな端近に突つ立つていけないで、私の前に座つて、哲っちゃんも一杯おやりよ…」

目尻にほんのり赤みの差した流し目で哲太郎を見た。側の長火鉢には鉄瓶が架かつていて、もう一本銚子が爛に浸かっていた。八千代は、自分の猪口を哲太郎に渡して、手ずから銚子の酒を注いだ。猪口には、八千代の紅い口紅がのつていた。それは、八千代が既に兆していて、哲太郎を受け入れる気であることを示していた。哲太郎は猪口に口を付けて口紅を舐め取るようにして酒を啜つた。

八千代は、既に大分酔っているのか、上体をふらふらと前後左右に揺らせながら、哲太郎に愚痴を聞かせるように話した。

「私はね、落籍ひかされた元の旦那が死んで、やっとその重荷から解放されて、文字通り私

の身体を張つて手に入れたこの舗を切り盛りするようになって、兼ねてお互いに気の合った同士で、哲つちゃんも知つての通り板長の正造さんと所帯を持って…、二人の子を設けて女としての幸せも手に入れた…、それなのに、たつた十四年で、大黒柱の正造さんに突然前触れもなくあつさりとお別れしてしまつて…、その幸せも中途半端になつてしまつたわ…、

子供達はまだ幼いし…、仕事は氣骨が折れるし…、私も女としては終つていないし…、どんなに氣丈にしても、女は弱いもの…、心細くなつて、誰かに支えてもらいたくなるんだよ…、」

「女将さん、云いたいことは良く解ります…、女にそれ以上言わせては、俺の男が廢ると云うもんです…、女将さんの氣持ちは、正造旦那が亡くなつた折から分り過ぎるほど良く解つていました…、おいらが独り身だつたら、すぐにでも女将さんの肩を支えられたんだけど、もうじき身二つになる曰く因縁のある女房もいるし…、大つぴらにはそんなわけにもいきません…、ですが、こんなおいらで良かったら…、それで女将さんの氣が休まるんだつたら…、女房を裏切ることになつたとしても、おいらは構いません…」

「私は悪い女にならうとしてゐるんだねえ…、これが私の女の性なのかねえ…」

「人皆それぞれですよ…、良いか悪いかは結果が決めるものでしょう…、八方丸く納まつて、幸せなら…、それに越したことはないと思ひますよ…、功德のためなら、おいらは

不貞も厭いません…、女だとして妙に道徳張つていては、身体に良くはありません…」

「改まってそんな風に云われると、気が削がれるねえ…、余計な愚痴を聞かせたりして…、流れが自然でなくなつてしまつたねえ…」

「女将さん、おいら、此処に入つて来た時から、その気でいましたよ…、男は一旦その気になったら、なかなか後には引けないもんです…、もう一度口紅のついた猪口に酒を注いでいただけませんか」

八千代は、哲太郎の裳裾が開けて、哲太郎の了え勃つた玉茎が下帯から透けて見えているのに気付いた。そして「今宵は行き着くところまで行くしかない…」と思ひながら、自分の猪口を哲太郎に渡して、銚子の酒を注いだ。

哲太郎は、その猪口にのつた口紅を舐め取るようにして猪口の酒を飲んだ。そして空の猪口を八千代に渡した。

八千代がその猪口を受け取ると直ぐ、哲太郎は八千代の酒気を帯びてほんのり紅みの差した白くて細い腕を掴んで自分の方に引き寄せた。八千代は、「あつ…」と小さく声を立てて、弾みで哲太郎の胸元に引き寄せられた。瞬間広くて分厚い哲太郎の身体に抱きかかえられて、八千代は頼もしい安心感に包み込まれるのを感じた。

哲太郎が太い腕で抱きすくめると、八千代は身体がふにやふにやと哲太郎の身体に溶け込んでしまうように感じた。哲太郎が乱れた裳裾から腕を差し込んで、下帯の中の八千代

の裸の尻を抱えて引き寄せると、八千代は大きく息を弾ませて、狂ったように哲太郎の下帯の中の玉茎を両手で握った。

哲太郎が八千代の尻から掌の前に差し入れると、そこは昔芸者時代からそうしていたのか脱毛されて、額口の半丘の上側を除いて、すべすべだった。哲太郎が中指で空割の谷間を弄ると、八千代は、腰を煽り上げるようにして、ますます逸り立ち、火床口から滴り落ちるほどの淫水を溢れさせた。

さちに教え込まれた哲太郎の性愛の手技が八千代の感覚を支配し、八千代は千々に乱れた。哲太郎は女もこのように発情して逸り立つのだということを始めて知った。後は何も余計な手続きは要らなかった。

哲太郎は、八千代の上体を左手で抱えて、右足を立て膝にしてその膝頭に八千代の左膝を抱え上げて、横取りの姿勢で一気におえ立つた玉茎を淫水の溢れる火床口に沈めた。

八千代は、曾て経験したことのないような大きな容量で自分の下腹が満たされるのを感じて、高く澄んだ声を長く引いて、哲太郎にしがみ付いた。八千代は火床の中も何やら得体の知れないふにやふにやした感じで、哲太郎にこれまでにない感覚を与えた。哲太郎が腰を動かして摺動運動を始めると、八千代は新内か清元でも謡うように、高く澄んできれいな声を上げて身体を細かく奮わせて悶え、乱れに乱れた。

「ああ〜っ…哲っちゃん、もうだめっ…、往くわっく…」

八千代が一層強く哲太郎にしがみ付いて来たのに合わせて、哲太郎も頂点に達し、どつと精を噴射して八千代の腰を更に強く自分の股間に押し付けた。哲太郎はそれから更に三合、玉莖を抜き出すことなく、精を交え、胡坐座あぐらざになつて八千代を茶臼に抱きかかえて八千代の全身を撫で擦った。八千代は、全身がしびれたような無感覚になり、ぐつたりとなつて、哲太郎の腕の中で眠つた。

小一時間も経つた頃、哲太郎は、そろそろ手石港の魚市場に行く時間だと思い、八千代を揺り起こして、まだ萎え切つていない玉莖を抜き出し、八千代の股間の始末をしてやり、抱きかかえて湯殿に行き、残り湯で二人の身体を洗い清めて身支度を整え、八千代の帳場の乱れも調べて、まだ朦朧としている八千代を居室に送り届けてから魚市場に向かった。

哲太郎は、道々、八千代の身体の不思議な感触を頭の中で反芻していた。あの身体の外も中也蕩けるようにふにやつとした感触は、さちにも冴子にもない感触だった。哲太郎がのめり込んださちの身体も随分と柔らかかつたが、八千代ほどのことはなかつた。

哲太郎が魚河岸に着くと、直ぐ後を追うようにサブもやつて来た。サブも板長として支店を切り盛りするようになって、支店独自の仕入れをするようになり、近頃は随分と成長して貫録が付いて来ていた。

魚河岸では、競りや仕入れに加わる仲買人や、大きな料理屋の頭たちが挨拶を交わして、

思い思いに気に入った魚を仕入れ、一息入れながらお互いに情報交換をしたり、世間話に一時花を咲かせてからそれぞれ家路に散って行くのがいつもの習慣だった。

最近の河岸での世間話での関心の的は、正造を亡くした後の金田中の女将の八千代のことだった。五十路に達したとはいえ、八千代がまだまだ花も実もある「女盛り…」だということをみんな知っていたから、当然と云えば当然のことだった。八千代との情事の記憶も生々しい哲太郎にとつては、早番話題に上すのを願ひ下げにもらいたいところだが、女将が独り身でいる限り、何やかやと噂に上るのは仕方ないことでもあった。

それにしても、淫水を滴らせて、逸りに逸って哲太郎の身体を求めてきた八千代の欲情した姿は、八千代の美しい姿からは想像がつかず、八千代の中に何やら別の魔物が棲んでいるような気さえした。

一方八千代は八千代で別の思いを嘯みしめることになった今宵の仕儀に自ら驚いていた。

八千代は哲太郎に支えられて居宅に戻ると、直ぐに自室の布団に潜り込んで綿のような眠りに落ちた。だが、平常朝が早く、寝起きの良い八千代は、三時間も眠るとすつきりとして目覚めた。ちょうど子供達が学校へ行く仕度をして降りてきて、朝食を取ろうとする

ところだった。八千代がそんな時間まで寝ていたことに子供達もその世話をする女中達も訝しく思ったが、取り立てて気にもしなかった。

「行つてきまあくす…」

子供達が八千代に声を掛けて出て行く姿を見遣り、

「道草せずに気を付けて行くんだよっ…」

母親に戻つて子供達の背に向かって注意をした後、八千代は、湯殿に入つて、朝湯を使った。

八千代の居宅は、万事和風の設えになつていたが、風呂と便所だけは洋式だった。殊に風呂は広くてゆったりしたバスタブが据えられていて、ガラス窓越しにこぢんまりした庭が望め、その先が料亭の南側の広い和風庭園に続いていた。八千代は、バスタブに浸かつて、窓越しにその庭の佇まいを眺めると気持ちがあぐつと和らぐので、その時間と空間が殊のほか気に入っていた。

バスタブに浸かりながら、八千代は哲太郎との一儀を頭の中で反芻した。同時に、いまだに自分の下腹が巨大な塊で占領されているような感覚が残つていて、それが哲太郎の道具立ての逸物ぶりを思い起こさせていた。そして、哲太郎の能力も予想を超えて人並

み外れていた。哲太郎は、八千代の多くの経験でも類を見ない「豪の者」だった。哲太郎は、魚河岸に行くことと、早出の従業員のことを氣遣つて途中で切り上げたようだったが、八千代は、腰が立たないほど疲れさせられたのを思い起こした。

「まともに付き合っていたら女が壊されそうだわ…」

そう思いながら、そつと自分の秘所に掌を押し付けた。「じゅん…」と、痺れのような疼きが走り、そこに刻み込まれたあの質量感が甦つてきた。

八千代は手鏡を取り出して、そこがどうなっているか調べた。常よりは紅みが差して、腫れぼつたい感じはしたが、炎症は起こしていないようだった。暫く適当な軟膏でも塗つて、様子を見ることにした。

「この感覚が長く続くようだったら、医者に診てもらわないといけないな…、そうなる」と地元の医者には行けないから、横浜か、東京に出なければならぬし…、少し厄介だな…」

「それにしても、若い時のように情に任せて激しい精を交えるような歳ではないのだから、自重しなければいけないよ…」

八千代は頭の中でひとり言ちた。

幸い、八千代は一旦満ち足りると気が昂ぶようになるには間が開く性質だったが、「河豚の毒にのめり込まないように…」と、自らを戒めた。

だが、三日も経つと、あの股間の重い感じが薄れ、大事なくやり過ごせたようだった。
「哲太郎との情事は、情の昂ぶりに任せて一気に突っ走ってはいけない……」

八千代は改めて自分を戒めた。

こうして、八千代と哲太郎の「大人の付き合い」が八千代のリードで続けられた。哲太郎は、さちが生きていたら……八千代より一つ若いだけだったから、同じように気を遣って、大事に、労りながら情を交えなければいけなかった筈だから、八千代が云うことは良く理解できた……、同じようなことは、冴子にも言える筈だった。

「昔は、將軍や大名の奥方は、三十歳を過ぎると、「お禰御辞退……」などと称して、殿さまとの情交を断ったようだし、「三十三歳は女の大厄……」だとしたのも、あながち故無きことではなく、老いて行く愛する女を労らなければいけない……と、いうことに他ならない……」

愛しい女たちのことを気遣って、哲太郎は思った。

七月に入って、七夕を過ぎると臨月に入り、冴子は、「高齢出産」と云うことで、

早めに入院するように勧められた。

「そうか…、いよいよ生まれるか…、医者がそう言うのなら、早めに入院していた方が安心だ…、」

毎日見舞いに行くし、時間の許す限り側に付いていてやるから…、俺に遠慮せずに入院した方がいいよ…」

そう云って、「陣痛が始まるぎりぎりまで家にいる…」と云う冴子の重い腰を押し込んで入院させてから僅か四日後に、冴子は哲太郎に瓜二つの色白の大きな男の児をいとも簡単に生んだ。冴子が入院して二日後に、母親の志乃が始めて南伊豆の冴子の元にやって来て、病院に付き添った。

身体の小さな志乃は、見上げるように大きな哲太郎を見て、初めは驚いたが、その懐の深い茫洋とした姿を見て、「この男なら冴子を不幸にはしない…」と確信し、「冴子を浚さらつてくれて、ありがとう…」と、札を言いさえた。

哲太郎は、お七夜に息子を藤とうた太と名付けて、役場に届けた。

冴子の産後の肥立ちも思ったよりも良く、「母子とも健康で、順調…」と云うことで、八月に入って退院することになった。

それで志乃はすっかり安心したと見えて、「お父さんのことが心配だから…」と云い、「お父さんに見せたい…」とて、親子三人を並べてインスタントカメラで写真を撮って、出産

十日後に佐久に引き返して行った。

志乃の帰りさに、冴子は、哲太郎の押す車椅子に赤ん坊を抱いて乗り、帰って行く志乃を病院の玄関口まで見送った。

「秋になって涼しくなったら、三人揃って里帰りするから…ね、

そう云ってお父さんを元気づけてあげて頂戴…、気を付けて帰ってねっ…、」

冴子が志乃の背に声を掛けた。

八月も終りに入って、つくつく法師が鳴き、朝夕の空気に秋の気配が感じられるようになった頃、志乃から電話が入った。

「藤太は、どうだへ…」と、志乃は先ず孫の育ち具合を聞いた。

「うん…、お乳をたくさん飲んで、哲太郎に似て勢いの良い児よ…、退院して二週間目の定期健診で計ったら、身長は普通の男の児よりも三センチも大きいのよ…、体重なんて、もう五キロを超えているの…」

「そうかへ…、それは頼もしいね…、ところで、お父さんがねえ…、藤太と婿殿に早く会いたいんだって…、長いこと入退院を繰り返して、病状が一進一退だから、「何時死ぬとも限らないから…」、なんて云ってねえ…、あなた、哲太郎さんに勤めの方のやり繰り付けてもらって、早く里帰りしてきておくれでないかねへ…、なんだか私までお父さんの

ことが心もとなく思えてきてねえ…、孫の顔でも見たら、元氣付くんじゃあないかと思つてねえ…」

「もしかして、お母さんの云う以上にお父さんの病状は良くないんじゃあないかしら…」

冴子は、そんな風に努めて何事もないかのよう云う志乃の声の様子に、何やら不安な気持ちになった。

「お母さん…、ほんとのところ、お父さんの病状はどうなの…、お母さんの云っている以上に悪いんじゃあないの…」

「お父さん、だんだん痩せてきているし…、お医者さんは、私にははつきり云わないんだけど…、康平たちの様子を見ると…、康平には違った風に云っているんじやないかと思つてねえ…、私は、お父さんが癌を患っているんじやあないかと疑っているんだよ…、だから一時も早くあなた達に会わせて上げたいと思つているのさ…」

「そう…、分つたわ…、哲太郎に話して、できるだけ早く帰るようにするわ…、はつきり決まったら知らせるわ…、お父さんにそう話して励ましてあげて…」

そう云つて、冴子は電話を切つた。冴子はもう何年も父親の顔を見ていないことを思い起こした。そして急に父が慕わしく思えてきて、「早く会いたい…」と、思うようになった。

哲太郎はいつものようにその夜更けに戻つて来て、冴子の背後から添い寝をしてきた時、

冴子はちようど藤太に乳を飲ませ了えたばかりだったので目覚めていた。

哲太郎が背中から抱えてくると、冴子は哲太郎の方に向き直って、その懐に身体を埋めて、志乃との電話のやり取りを話した。

「**そうか**、**つ**それなら早く帰って藤太を見せてあげた方が良さそうだな…、今日女将と話して、何日にするか決めよう…、ここのところ俺も働き詰だから、一週間ぐらい休みを貰ってもいいだろう…、冴子とも随分とご無沙汰だしなあ…」

哲太郎はあらぬ方向に話を逸らして、冴子の額口の生え際を掌で弄りながら云った。冴子は額口の生え際を短く刈り込んでいた。

「久方ぶりに俺を迎え入れたい気分になつてゐるんだな…」

哲太郎は、それに気付いて云った。

「哲太郎の女ですもの…、少しはお相手をしないと、他の女に盗られちゃうでしょう…、あなたは女なしでは居られないようだしね…」

冴子は哲太郎の指の動きに反応して、腰を前に突き出しながら云った。哲太郎は冴子の言い草に一瞬どきりとして、「冴子は、俺と女将との関係に気付いてゐるのではないか…」、と思つた。だが、直ぐにそんな邪推を追い払つて、哲太郎は、夜着の中に潜り込んで、冴子の両膝を抱え上げて空割に唇を押し当てていった。

「ああつ…」と声を上げて、冴子は腰を悶えさせた。冴子のそこは、あの当事のよ

うに甘い匂いはなかったが、ずっと熟れた女の艶めかしい匂いがした。その匂いは、八千代のものとも違っていた。

哲太郎の舌と唇の動きに連れて、冴子は腰と太股を小刻みに震わせ、しゃくり上げるようにして腰を突き上げた。哲太郎が唇で小核をとらえて舌の中で転がすと、冴子は悲鳴のような甲高い声を上げて、息を詰めて最初の頂上に昇り詰めてぐったりとなった。

「暫く、ご無沙汰している間に、随分と感度が良くなっているんだな……」

タイミングを全く外されて冴子独りに頂上に昇り詰められて、慥然としながら哲太郎は思った。

最近の冴子は、一度果てるとなかなか気が昂ぶらなくなっていた。結局、哲太郎は、冴子を腹の中に抱きかかえて、自分のおえ立った玉茎を冴子の太股の間に挟ませて、眠りに就くことになった、そして二時間ほども眠って目が覚めた時には、もう魚河岸に向かう時間になっていた。

「生活のしがらみの中で、共有する時間がずれたりすると、なかなか一緒に気を入れて性愛に没頭できない事情が多くなるな……」

哲太郎は、まだ明けやらぬ道を手石港ていしやうの魚河岸に向けて車を走らせながら思った。

その日魚河岸から戻ると、哲太郎は、八千代に事情を話して一週間ほど休みをくれるよ

うに云った。

「その間、板場は、サブをこちらに呼び戻して仕切らせ、秀次と正平に助けさせれば、料理の質も品格も保てます…」

八千代を納得させようとして、哲太郎は自分の考えを云った。

「本当は哲つちゃんに長いこと休まれると、中が締まらなくなるので困るんだけどね…、この時期は、一息入ってお客の方もそれほど多くないからねえ…、板場さえしっかり守ってもらえるように差配しておいてくれるなら…、哲つちゃんもこのところ働き詰めだし…、私は構わないよ…」

八千代は、不承不承の態を装って、哲太郎に同意した。

と云うことで、その三日後に、冴子は、親子三人で、買い替えたばかりの哲太郎愛用の黒塗りのポルシェクーペで三年ぶりに佐久に戻った。

冴子の父親の康作は佐久中央病院に入院していた。

「三日前から待ち焦がれていた……」

冴子たち親子三人が病室に入ると、康作はベッドの上に起き直つて、顔を紅潮させて三人を迎えた。康作は、想像していたよりは元氣そうに見えた。

三人部屋の狭い病室のうえ、大きな哲太郎が入つてきて、尚更身の置き所もないほど狭くなり、初対面の挨拶もそこそこに、康作は、とにかく冴子と、その連れ合いの哲太郎と孫の藤太に会えたことを喜んだ。康作には、多くを語らずともそれで十分だった。

「大男だ……」と、志乃から話しを聞かされていて想像してはいたものの、実際にベッドの端に突っ立っている哲太郎を目の前に見ると、山のように聳えて見え、その茫洋とした風貌と共に、「成るほど聞きしに勝る男振りじゃわい……」と、一時の怒りなど吹き飛んでしまったかのように、すっかり気に入つた様子だった。

その哲太郎の腕の中に抱かれて小粒のように見えていた藤太も、実際に康作が腕の中に抱いて見ると、丸々と肥えて大きく、ずしりと持ち重りがした。そして、父親に似て色白で茫洋とした風貌がすっかり気に入つてしまい、「良かった……、良かった……、冴子がこんな子宝に恵まれて……、ほんに良かった……」と、康作は涙ぐまばかりにして喜んだ。

「娘夫婦たちと孫の誕生を祝いたいので、一時退院させてもらいたい……」

冴子たち親子に会えたことが気持ちの張りを与えたのか、俄に元氣付いて、康作は主治

医に申し出てその日の内に一時帰宅した。

その翌日、康作は、哲太郎の両親と康平夫婦も招いて、藤太の誕生と冴子たち夫婦と両家の対面を祝う多少儀式張った宴を催した。それは、同時に、康作にとつては冴子たち一家との永遠の別れの宴のつもりでもあった。

哲太郎の両親も、予め哲太郎から話を聞かされてはいたものの、冴子とその両親と孫の藤太に会うのは初めてだった。だが、冴子との「略奪結婚」の話は哲太郎から聞かされていたとはいえ、保守的な空気の強い田舎町のことで、大つぴらに祝えるような筋のことではなく、終始神妙な姿勢を保っていた。

精一杯元氣そうに見せ、陽気に振る舞っていた康作だったが、宴席が撥ねたその夜さりに、再び具合が悪くなり、救急車で病院に舞い戻った。そして、康作はそのまま帰らぬ人となった。

哲太郎は、急遽金田中に電話して、事情を話し、郷里での滞在を冴子の父親の初七日の納骨まで延ばすことを了承してもらい、両家の家族だけの密葬で慌ただしく葬儀を行って、十日目に南伊豆に戻った。

その間に冴子は、既に歳老いて来ている母の志乃の処遇をどうするか、志乃を交えて康平と兄妹で話し合った。冴子は、志乃に一人暮らしをさせるに忍びなかったので、兄の康

平一家が家に戻ってくることを提案した。だが、

「わたしや、それほど老け込んだじゃあ居ないし、独りでお父さんの墓前を弔っている方が、気楽でいい…」

康平の嫁の時枝と折り合いの良くない志乃は、肯んじなかつた。康平も嫁姑の間の不仲なことを知っていて、二人の板挟みになって余計な気苦労が増えるのを嫌がり、結局康平の遺した遺産は、全部志乃が継ぐように決めて、志乃の願いを叶えることにした。志乃は、何れ折りを見て遺産を処分して、冴子たちと一緒に住みたい腹でいたが、身体の動く間は住み慣れた佐久の町を離れたくなかつたのだ。
